

『飯川町の大ケアキ①』

飯川町に、周り二丈七尺、高さ十五間、樹齢五百年といわれる「ケアキの大木」がある。しめ縄がまかれ、天然記念物になっている。

昔は、頓聴寺の境内にあったそうで、いつの頃からか、この大木に天狗が住むようになった。この木の向かい側には、七尾酒の元祖といわれた旧家があった。ある年、夜も深々とふけた真夜中に、その家の酒蔵に何者かが忍び込んでいるのを、蔵番が見つけた。

「すわっー、泥棒だあ。」

と蔵番は、大尺棒を振りかざし、酒蔵の中へ踊り込んだ。…と、とたんに目をまわし、気絶してしまった。それもそのはず、くせ者は、五寸もあるような長い、しかも太い鼻で、真っ赤な顔、一枚歯のゲタをはいた身の丈、六尺余りの大天狗でした。

翌朝、家の人々が起きてみみると、酒蔵の戸が開いているので不審に思った。そこで、蔵の中を見たところ、蔵番がだらしなく気絶しており、酒樽もいくつか空になっていた。ようやく、息を吹き返した蔵番の話で、天狗の仕業とわかった。不思議なことに、その年は、近年にない不作に見舞われた。その後も、天狗が旧家の酒蔵へ酒を飲み舞い降りた年は、必ず凶作であった。人々は、凶作の前兆として恐れおののいた。

そこで、村の人々が集まって相談した結果、その大木にしめ縄をはって、悪童たちのいたずらを禁ずるとともに、天狗の好きな酒を献上して、お出ましを防ぐことにした。天狗は、大喜びをしたのか、それ以来、姿を現さなかったという。以後、この大木は、村の繁栄のシンボルとなった。

私たちが子どもの頃、おじいちゃんやおばあちゃんに、この話を聞かされた。

「大ケアキから、よくタンタンと太鼓の音が聞こえ、白いものがスーッと酒屋に入り、また、スーッとケアキへ登って行ったのを、何度も見た…」

子ども心に本当にしたものでした。今でも、夜更けにそのような見方をすると、かすかに太鼓の音が聞こえてくるような気がします。

(飯川町 伝承)

